

第5回 優秀賞(銀の星賞) 受賞作品

「家族になろう」

栃木県 作新学院高等学校 三年 山本晴佳



賢治のまちから
高校生★童話大賞

銀の星賞

栃木県 作新学院高等学校 三年 山本 晴佳

『家族になろう』

家へと走って帰りながら、私はわくわくが止まらない。今日、ママが犬をもらってくることになっているのだ。玄関のチャイムを押すとママがドアをあける。私はランドセルを肩から下ろしながら、急いで靴を脱いだ。

「よ、ワンちゃんは？もう来てるんでしょ。」

「ほらほら慌てないの。あんまり騒ぐと驚いちゃうでしょ。居間にいるわ。」
私はなるたけ足音を鳴らさないように、でも出来る限りの駆け足で向かう。

居間のドアの前でちよつと止まって、ドキドキする胸を感じながら、息をのんでノブを引いた。頭の中では小さくてかわいい、毛のふわふわした犬が走り回っている。どんなかわいい子だろう……。

開いたドアの向こうには——、大きくていかめしい顔をした、一匹の茶色い犬がいた。

「……この子？」

「町田さんのところのロクよ。町田さん長期入院することになってね。その間、人に預けっぱなしなのもかわいそうだから、もらってくれる人を捜してたんですって。」

「ちがうよ——っ。」

私は思わず声を上げた。

「私が欲しいのと全然ちがう！だって子犬じゃないしっ。毛もふわふわじゃないし……。」

ロクは私を一回り小さくしたくらいに大きい。毛は短く、その茶色もなんだかくすんでいる。それに何より、顔がおっかない。

「やだー、怖いよ。今にも噛み付いてきそう。私さわれない。ね、町田さんに返して来よう。」

こっちを見ているロクの目は鋭く、口元からのぞく歯は立派でとがっている。私は必死でママのエプロンを引っぱった。

「何いつてるのっ。ともか、犬が飼いたかったんでしょ。ロクは大人しい良い子よ。」

「うそ、ともか食べられちゃうよ。こんな大きいんだよ。ともかなんてペロリだよ。」

「もう、見た目で判断するんじゃないの。ロクを飼うことはもう決まったの。」

「そんな・・・」

私の言葉をさえぎるように玄関で音がする。パパが帰ってきたんだ。ママは出迎えに行き、私は文句を言うことができなくなってしまった。パパはというと、帰ってくるなりロクを見て嬉しそうに体中をなでまわした。

「なんだ、すいぶんと男前じゃないか。」

男前よりかわいい犬の方が良いよ、と思う私をよそに、パパはロクが気に入ったようだ。

「ロクの皿は？歓迎のごちそうをやるう。」

ママが用意したお皿に、パパが自分のお皿からお肉を取ってのせる。ロクは怖い顔に似合わずマナーが良く、静かにお皿の前に座り、ママがぼんと背中を叩いてからようやくやく食べ始めた。パパはその姿にさらにロクを気に入ったみたい。また一切れお肉をロクのお皿に入れた。

「そうだ。今度の休みの遊びに行く予定なんだけど、急に仕事が入っちゃったんだ。ともかには悪いが、今回は取りやめだ。」

「ええっ。」

いきなりの言葉に私は不満の声を上げた。

「仕方ないでしょ。パパはお仕事なんだから。また今度連れて行ってあげるわよ。」

「そんなこと言って、今度いつになるか分からないじゃないっ」
楽しみにしてた犬は期待と正反対、そのうえお出かけまでなくなるなんて、最低だよ。私は涙ぐんだ。

「やだ、やだ、やだあつ、行こうよ！」

「わがまま言うんじゃないっ！」

ママはついに怒ってしまった。私はさらに涙が止まらなくなり、ママとパパが食べ終えても一人でテーブルについたままぐずぐず泣いていた。するとなんだか足にあったかいものが当たる。なんだろう、とテーブルの下を覗き込むと、そこにはロクのあのおっかない顔があった。

食べられる！ 涙が一瞬でかわいた。でもロクは噛みつきも吠えもせず、ただ座って私を見上げていた。そして私が静かになったのを見てから、ロクは立ち上がって私のスカートの裾をくわえる。裾を引かれ、促されるように、私は立つ。そしてそのままロクは私を引っばって歩き出した。

「ちよつと、なに、なに？」

ロクは台所の方へ入っていく。流しで夕ご飯の片付けをしていたママが振り向いた。

「どうしたの？」

怒られたばかりの私は気まずくて戻ろうとするのだけれど、ロクの力は強くて逆らってもぐいぐい連れてかれてしまう。結局、ロクと共にママの前へ。するとロクはそこでピタリと止まって動かなくなってしまった。

私は困った。スカートを放させようとして、ロクをちよんちよんとつついてみたり、「お願いだから放して、ね？」と恐る恐る話かけてみたり。けれどロクはその場を動かこうとしない。どうにもできずに私は途方にくれてママに目を向けた。

ママは私とロクの様子を見て吹き出した。笑っているママを見ると、始めは居心地の悪かった私もだんだんおかしくなってきた、気まずさを忘れてエへへと笑う。ママは目元のにじんだ涙を拭いて、

「ああおかしい。あなた達何やってるの？」

私との間に座り込んだロクの顔を両手で包み込むようになってた。ロクはただ黙ってされるがままになっている。私もおそろおそろ反対側からロクの顔を覗き込んだ。怖い顔のママの手でくしゃくしゃにされている。

「ともかもなでてみなさいよ。このとおり噛んだりしないから大丈夫よ。」

私ももう一度ロクの顔を見る。そしてそれから、そつとその茶色い背中をなでた。手の平のロクのちくちくとした毛の感触と、体温が伝わってくる。微かに鼓動も感じられて、ああ、生きてる、と当たり前前のことを思う。

当たり前前のことなのに、手を伝わってくるその力強い脈打ちが、とても神秘的で、感動的に感じた。それに、とても優しい手触り。

ロクは私の手が離れると、スカートを放し居間へと戻って行く。その後ろについて私もテーブルに戻る、そして途中になっていたご飯をまた食べ始めた。

ふと思い立って、ロクの前にある空っぽになったお皿に自分のお肉を一切れつまんで、少し上から落としてみる。ロクが私を見る。

「あげるよ。仲直りさせてくれたお礼。」

私が食べるジュエスチャーをすると、くんくんと匂いを嗅ぎ始めた。パパのみたいに食べてくれるかな。つい息を止めて私は見守った。

その前で、ロクはぱくんとお肉を口に入れた。

「わ・・・食べた！」

思わず声が漏れる。ロクはこっちを気にするようにちらちら見ながら、黙ってもぐもぐし続けている。そんな様子のロクはおかしくて、なんだかわいらしくさえ見える。

私はだんだん怖さが薄れてきて、テーブルの上にあったパンを小さくちぎってロクが食べているお皿の端にちょこんと置いてみた。それもロクが食べると私はさらに力づき、今度は手の平にパンをのせてロクに差し出す。ロクは上向きに様子を窺い、顔を近づける。ロクの鼻の当たる感触が指の先に感じられてこくりと息を飲む。ロクはもう一度私を見つめて、それからキバが当たらないようにパンの上の方かじって、上手に口を入れた。もぐもぐと動く口を見て私は嬉しくなって、ゆかいになって、すぐくすぐく胸が弾んで、それで、それで……つ。

私は興奮して、今の出来事を知らせに台所に駆け込んだ。

「ママ、ロク食べたよ！ 私の手からパンを食べたよっ。」

このことから私はロクの食事係りになった。朝はドッグフードと新しいお水を準備して、お昼は学校があるからできないけれど、夜にはロクのお皿にテーブルの上の料理を少し分けてあげるの。

ロクはとても賢く、私のイスの横にロクのお皿を置くようにしたら、ご飯の時間になると自分からそこに座るようになった。私が「ロク」と呼ぶと、食べているお皿から顔を上げて、私が新たな料理をよそうのも待つ。犬を飼ったことのない私にはロクとの散歩も遊びもお世話も、何もかも初めてづくしだ。学校から帰ると、一目散にロクのところへ行く。毎日が発見の連続だ。一つ発見する度に、また一つロクを好きになっていく。

たとえば、日のあたる窓際で、お気に入りの黄色のクッションに横になるのがロクの日課。それで、眠たいときはその迫力のある目元をとろんとさせている。もうロクのことは、ちつとも怖くない。散歩のときに転んだ私を起こしてくれるぐらい、ロクが優しいって言うのだから、私は知ったんだから。

「今日はちょっと遠出してみようか。」

あるお休みの日の散歩。私は思いつきで、いつもの散歩コースの折り返し地点である公園を通り抜け、先へ進むことにした。その道は見知らぬ団地の中に入り込んでいた。

この辺りは家から離れていることもあって、あまり馴染みがない。きよろきよろと周りを眺めていると、私の歩調に合わせてゆったりと歩いていたロクが、ふいに止まった。

「ロク？」

ロクは耳をピンと立てて緊張した様子に見える。じっと視線を宙の一点に向け、私の言葉にも耳を貸さない。らしくない様子に心配になり、私がロクをなでながら隣にしゃがみ込もうとしたとたん、ロクは駆け出した。突然のことに私は散歩紐を放してしまった。

「ロク！待って！」

ロクは止まらない。すごい勢いでいちもくさんにどこかへと走っていく。懸命に追いかけてはみたものの、すぐに見えなくなってしまった。私は夢中でロクが曲がった道に入った。と、その角の家の前にロクは座っていた。

「ロクウ・・・ッ。」

私はほっとして駆け寄る。息が切れてせいぜいしながらロクの頭をなでたら、その体はいつもとちがって強ばっていた。驚いて覗き込むと、堅固な顔をより険しくさせて、目の前の家を凝視している。

私はその家の表札を見た。そこには、町田、と書かれている。もしかして、ロクを前に飼っていた、町田さんの家なんだ。私は表札から目を離して、ロクへと視線を戻す。

ロクは門の中に入り、うろろうろと家の周りを熱心に嗅ぎ回っている。でも、家の中に人がいないのが分かると、しょぼんとしっぽを垂らして玄関の前に戻ってきて、またそこに腰を下ろした。じっと家を見つめる。

クウーン、とロクは悲しそうに一鳴きました。

その一声で、私の胸を締め付けるには十分だった。ロクの声は無人の家の中へ吸い込まれていく。見てられなかった。

「町田さんはいないよ。帰ろう、ロク。」

くいつと軽く首輪紐を引いても、ロクの体重は重く、その場にとどまろうとする。少し強めに引っ張る。ロクはいやいやをした。あの優しいロクが、とてもかたくなだ。

ふ、とさみしくなって、私はそれ以上ロクに何もできなかった。

ロクはずいぶんと長いこと町田さんの家の前にいた。家に帰ってからも元気がなくて、ご飯もいつもの半分しか食べなかった。

「ロクはどうしたの？ なんだかしょんぼりしているけど。」

パパとママに聞かれても、本当のことを告げる気にはなれなくて、「よく分からないけど、今日はなんだか元気がないの」と曖昧な返事をする。

「そう。風邪でもひいたのかしら。動物病院でも調べておこうかしら。」

「うん。でも少し様子を見てみよう。明日には元気になるかもしれないし。」期待を込めてそう言ったものの、ロクはそれから毎日、どこかしょんぼりしたままだった。

「ロークツ。ほら、おいしそうですね？ 私のお小遣いで買ったんだよお。」

私はロクに元気になってもらおうとあれやこれやと手を尽くす。何度もデラッシングをしたり、たくさん話しかけたり。今はロクの目の前に犬用のビーフジャーキーをひらひらさせている。ロクはしつぽを一振りさせて顔をちよつと上げた。でもそれだけ。食べてはくれなかった。

私はため息をついた。一番高くておいしそうなのを買ったんだけどなあ……。あきらめてジャーキーを袋に戻す。

「ようし、じゃあお散歩に行こう！」

私はがっかりする気持ちを追い払うように勢いよく立ち上がり、壁に掛けてある首輪を取って、ロクよつけた。

「ロクの散歩に行ってくるねっ。」

ママに言っただけで家を出ると、外の天気は最高だった。雲一つない青い空はいつもより高く、日差しはぽかぽかとロクの茶色い毛皮と私の肌にもふりそそぐ。

こんなに天気が良いのだから、川原のほうに行ってみよう。あそこは気持ち良いし、散歩している他の犬たちがたくさんいるから、ロクに友達が出来ても構わない。私の隣を心なしかうつむいて歩いている、ロクの垂れたしっぽを見ながら、私はそう思った。

想像通り、河原にはたくさんの人や犬がいた。青々とした芝生と眩い光がとても気持ち良い。私はロクを振り返る。ロクは眩しそうに目をしばしばさせて空を見上げていた。

「ロクッ。」

私は持ってきたボールを思い切り投げる。ロクはそれを目で追いかけて、芝生の上で弾むのを見ると、駆け出してちゃんと取ってきた。

「すっすっすっすっ。」

私とロクはボールを投げたり、走ったり、芝生の上に横になってみたり、とにかくロクが喜びそうなことを片端からやった。久々のロクの活発な姿を見て、私は気分が高揚するのを感じた。

ほどほど遊んだところで、私はごそごそとポケットからさっきのジャーキーを取り出し、今度こそ、とロクにあげてみる。ロクはくんくんと匂いをかいで、でもやっぱり、食べてはくれなかった。

だめか。がっかりして、さっきまでの明るい気分がウソのように流れる。心地の良い風も、日光で暖められた地面も、隣にいるロクも、何一つ変わりはないのに、すべてが遠く感じられた。

横になったロクの体を首からしっぽまで、ゆっくりなでた。静かになつた私の横で、ロクも顔を伏せてしまっている。

私は立ち上がった。ロクもそれをみて立ち上がる。頭の中に相反する思いを抱えながら、私は一つの場所に向かって歩き出した。行こう、と思ひ、行きたくない、とも思う。

もと来た道に戻り、いつもの散歩コースへと出て、折り返し地点の公園を抜けて―。

ロクは行き先に気づいたのか、顔をきよろきよろと動かして反応をし始め、次第に私を引っ張るようになる。そして町田さんの家の前に着くと嬉しそうにしっぽを大きくばたつかせた。家の門の数歩前で立ち止った私が首輪の紐を手放すと、こらえきれないように門の中へと飛び込む。

私が何をして落ち込んだままだったのに。ロクは今、とても澁刺として町田さんの家の様子を窺っている。目は喜びできらきらしている。あつというまに元気になった。

けれどロクはそれから町田さんがいないことを確かめると、がっくりしたように頭を下げて戻ってきた。帰りの道を、私もロクも肩を落として歩いた。ロクはまたすっかり元気をなくしている。私も泣きたい気持ちだ。

驚じゃ、だめなんだ。私は本当の意味でロクの家族にはなれない。ロクの中ではいつまでも町田さんだけか家族なんだ。私じゃロクが本当に欲しい物はあげられない。

上下に揺れるロクの大きいはずの背中がやたらと小さく思える。下を向いた顔や、とぼとぼ歩く足と垂れ下がったしっぽ。それらがとつてもかわいそうで、愛しくて、大切に……、幸せにしてあげたかった。

家に帰り、ロクの首輪を元の場所に片付けながら、私は台所のテーブル

でお茶を飲んでいたママに話かけた。

「ママ、お願いがあるんだけど。」

「なに？何かおねだりでもするの？」

「ロクをね、・・・ロクを、町田さんに返すことってできないかな？」

ママは目を丸くして私を見た。

「急に何を言うの？ロクのことあんなにかわいがってるのに。嫌いになったの？」

「ちがうよ。そうじゃない。ロクは大好きだよ。でも、ロクはうちよりも町田さんの家で暮らすほうが幸せなんだよ。だってロクの家族は町田さんなんだもん。」

しゃべっているうちに私は語尾がだんだん弱くなり、最後は消え入るような声になった。

「・・・前に町田さんの家に行ったら、ロクはそこからちっとも動こうとしなかったの。最近元気がないのも、それが原因。私は何をしてもだめだったのに、町田さんの家に行ったらすぐに元気になるし。でも町田さんは家にいないからまた落ち込んじゃうし。」

ロク、かわいそうだよ。このまま町田さんと離れたままじゃ、かわいそう・・・。」

ママは息をついて、しゃくり上げる私の背中をさすってくれた。その手の優しさに、だんだんと頭がふんわりしてきて、少し夢見心地になって、そういえばママとケンカをしたとき、ロクが仲直りをさせてくれたなあ、なんてふっと思い出した。

ママの手はとっても気持ち良い。ずっと小さな頃から思ってた。まるで魔法みたいだって。どんなときだって触れていると、気持ちを和らげてくれる。温度、手触り、匂い。全てが悲しいことを、みんな包み込んでくれる。

—— 家族って、こういうことなんだ。生まれたときから体に浸み込ん

でるみたいに、側にいると居心地が良くて心がほっとする。友達も先生もどんなに大好きな人でも、その代わりにはならない。私にとっての家族はパパとママだけなのと同じように、ロクには町田さんじゃなくちゃだめなんだろう。

たとえば、何年も何十年も一緒に暮らして、側にいるのが当たり前になるくらい多くのときを過ごせば、家族になれるかもしれない。でも、今は――。ママは少しの間を空けて、それから「実はね」と口を開いた。

「町田さん思いのほか病気の状態が軽くて、すぐに退院できるかもしれないんですって。」

私はママを見つめる。

「だから町田さんにロクを返すことはできると思うわ。でも、ともかはそれでいいの？」

「……うん……、いいの。」

私はロクが本当に好きだけれど、だから本当にさみしいことだけれど、ロクにはそれが、町田さんの側にいることか、本当の幸せなのだから。

パパにも帰宅してからその話をした。パパも残念そうな顔をしたけれど、ここ何日ものロクの元気のない姿を見ていたので、「犬っていうのは忠誠心が強いからなあ」と言って賛成してくれた。町田さんが退院するのを待つて、それからロクを連れて話をしに行くことになった。

できることならロクにそのことを教えて元気にしてあげたいけれど、それはできないので、その代わりに私は今まで以上に一生懸命世話をすることにした。ロクのブラッシングも、シャンプーも、ご飯をあげるのももうすぐできなくなる。それは、とてもさみしい。

私を見上げるロクの表情、指を通る毛皮の感触、穏和な仕草。ぜんぶ宝箱につめて、ずっと大切にとっておいたら良いのに。そうしたら心の真ん

中において、さみしくなる度に、蓋を開けるのに。

それから一週間後町田さんが退院し、その翌日に町田さんの家を訪ねる
ことになった。

「ロク、おはよう！」

その当時の朝、私は張り切ってロクのご飯の準備をする。いつも通りテーブルと床にお皿を並べて食べながら、自分のウインナーを分けてあげた。それからいつもより何倍も何倍も丹念に、毛皮の手入れをする。

「ようし！世界で一番かっこいいよ。」

両手でロクの頬を挟み、満足して頷いた。

「おーい、そろそろ行くぞ。」

「はあい。」

パパに呼ばれて、私はロクとママとともに家を出て、車に乗り込む。

「ロクがいなくなるとさみしくなるなあ。」

後ろのシートにロクが行儀よく座り込んだのを見て、パパが呟いた。車はパパの運転で出発する。車だと町田さんの家まではすぐだ。あの公園沿いの道路にさしかかると、今まで大人しかかったロクがそわそわし始めた。町田さんの家の近くだと分かったんだろう。

「……………ねえパパ、私、ここで降りていい？」

「町田さんの家に行かないのか？」

「あっちまで行ったらロクと別れられない気がする。ここから歩いてかえるよ。だめ？」

「まあいいよ。町田さんにはパパたちから説明しておくさ。」

「お願い。」

パパが道路の脇に車を寄せる。私は後部座席に並んで座っていたロクの首に抱きついた。顔に短い毛があたってこそばゆい。腕の間から、ロクの

匂いがする。昨日したばかりのシャンプーの匂いも香ってきた。あつたかい体。とうとう涙がこぼれてしまった。私は泣きながらロクの毛に顔を埋めた。

「ここでお別れだよ、これ以上一緒に行くのはつらいから。ついていけなくてごめんね。」

ロク、大好きだよ……。幸せになるんだからね……。大好きだよ……。つ。言ってロク放し、すぐさまドアを閉めた。

「出発して良いよ。」

「じゃあ、行ってくるからね。」

ロクが首をかしげてウインドー越しに私を見ている。私もロクを見た。

ロクと、家族になりたかった。

車が発信する。ロクは遠ざかっていく私に合わせて首を動かす。その姿が最後だった。日の光が反射して車の中が見えなくなり、やがて車すら見えなくなった。私はしばらく誰もいない道を見続けてから、家に帰った。

居間のフローリングにごろんと横になって、窓から入る太陽の光に目を細める。こんなときなのに、空がひれいだな、と思った。光の中に金の粉のようなほこりから舞っている。頭の下にひいたクッションから、ロクの匂いがした。ついさつき抱きしめたロクの感触が思い出される。

「ロク……。」

そのとき、ガチャンと玄関のドアが開く音がした。もうパパ達が帰ってきた？

その後のダカダカダカッというすごい足音に私はびっくりしてはね起きる。

すると居間へのドアがこれまた大きな音をたてて開けられて、そこから、ロクが飛び込んできた。

「ロク！」

ロクは私の膝に両手をのせて「ワン！」と鳴いた。ロクの後からパパとママが姿を現す。

「なんでロクと戻ってきてるの？」

驚く私に、ママが疲れた様子で言った。

「あの後ロクが急に騒ぎ始めたのよ。酔ったのかもしれないと思って外の空気を吸わせようとドアを開けたら走り出しちゃって。」

「あわてて追いかけたんだ。町田さんの家に向かうのかと思ったら、ロクはうちに戻っていくじゃないか。で、玄関のドアを開けたとたん、今のとおりだ。いやあ、驚いた。」

私は信じられずに目の前のロクを見る。

ロクは窺うようにじっと私を覗き込んでいる。その目は、〴〵ここにいてもいい？ 〴〵そう聞いている気がした。凜々しい顔つきのロクの、そんな気弱な様子がつとてもかわいくて、私は笑う。胸に込み上げてくる嬉しさと共に。

うん、いいよ。ここでずっと一緒に暮らそう。毎日並んでご飯を食べて、いっぱい遊んで、いろんなことをしようよ。何年も、何年も一緒に。側にいるのが当たり前になるまで。

ねえロク、家族になろう。